

論文要約

論文題名

成人期自閉スペクトラム症の生活，修学，就労状況に関する診療録調査

掲載雑誌名

精神科 第40巻 第6号 870-877頁 2022年掲載

医学研究科内科系精神医学専攻 博士課程 西尾 崇志

論文要約

【背景・目的】

自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder : ASD) は神経発達障害の一種である。成人期 ASD の有病率は 1~1.7%と決して稀な障害ではない。しかしながら，成人期に医療機関を受診される ASD の背景，生活状況，受診に至るまでの修学・就労状況については，これまで明らかとなっていない。昭和大学附属烏山病院では 2008 年より成人を主な対象とする発達障害専門外来を開設している。本研究では，発達障害専門外来を受診し，ASD と診断された患者の背景，生活状況，受診に至るまでの修学・就労状況について検討した。

【方法】

本研究では，2008 年 4 月から 2017 年 3 月までの発達障害専門外来における診療録を後方視的に調査した。受診者は，問診票と自閉症スペクトラム指数 (Autism Spectrum Quotient : AQ) を記入した後，精神科医による面接がおこなわれる。面接が終了した後，ICD-10，DSM-IV，DSM-5 のいずれかに基づき担当した精神科医が診断している。本研究においては，アスペルガー症候群，広汎性発達障害，特定不能の広汎性発達障害，自閉症の診断名の表記を ASD としてまとめた。注意欠如多動症 (attention deficit hyperactivity disorder : ADHD) あるいは限局性学習症 (specific learning disorder : SLD) を併存していると診断されていた場合には本研究から除外した。発達障害専門外来を受診した者のうち，精神疾患の診断を満たさなかった受診者を対照群として設定した。対象者の背景，初診時の生活状況，18 歳までの問題，修学状況，就労状況について，診療録を後方視的に調査した。本研究は昭和大学附属烏山病院の倫理委員会で承認されたものであり，本研究に関する患者の説明と同意には，オプトアウトを適応した。

【結果】

ASD 群 749 名，対照群 168 名，合計 917 名を調査対象者とした．初診時の年齢は ASD 群で平均 29.2 歳，対照群は平均 36.0 歳であり，対照群は有意に年齢が高かった．ASD の診断を受けた年齢は，平均 27.1 歳であった．AQ 値は ASD 群で平均 34.6，対照群で平均 27.1 であり，有意に ASD 群で点数が高かった．ASD 群では結婚歴のある割合は全体の 9.9%であり，対照群の 44.6%と比較して有意に低かった．ASD 群では挙児がある割合は 43.2%であり，対照群の 69.3%と比較して有意に低かった．いじめられた経験がある割合は，ASD 群では 46.6%であり，対照群の 13.7%と比較して有意に高かった．不登校歴の割合は，ASD 群では 19.8%であり，対照群の 5.4%よりも有意に高かった．家庭内暴力歴の割合は，ASD 群では 5.2%であったが，対照群では 0%であった．高校までに大きな差はないものの，大学時代に留年もしくは中退した割合は ASD 群では 26.9%であり，対照群の 11.2%と比較して有意に高かった．大学卒業後に就労できた割合は，ASD 群では 67.3%であり，対照群の 90.3%と比較して有意に低かった．初診時に，就労していた割合は ASD 群では 41.3%であり，対照群の 70.7%よりも有意に低かった．当院受診までの就労経験に関しては，ASD 群では 64.3%であり，対照群の 88.2%と比較して有意に低かった．

【考察】

初診時の ASD 群の年齢は，平均 29.2 歳であり，大学進学，就職活動，あるいは就労開始という若年時に直面しやすいライフイベントへの困難が受診のきっかけになっていると推察された．ASD 群において，結婚している割合は約 10%，挙児のある割合は 43%と対照群よりも少なく，コミュニケーションの苦手さや就労の困難さが影響していると考えられた．また，本邦における平均結婚年齢が男性 31.2 歳，女性 29.6 歳であることを考慮すると，平均 29.2 歳の ASD 群の 10%という結婚率は著しく低いものと想定される．ASD 群において，学生時代にいじめられた経験がある割合は約 46%，不登校を経験した割合が 20%と対照群よりも高く，ASD 傾向がいじめのリスクを高めていることが示唆された．高校までは大きな差はないものの，大学では ASD の約 27%が留年あるいは中退を経験しており，大学では自由度が増えるため，ASD 特性による困難さが表面化しやすいと考えられた．初診時の ASD 群の就労率は約 41%，就労経験がある割合は約 64%と対照群よりも低かった．就職面接，対人関係で失敗しやすいことから，発達障害の中でも成人の就労で最も支援ニーズが高いのは ASD であるといわれており，本研究も ASD の就労における困難を支持する結果であった．

【参考文献】

- 1) 岩渕俊樹, 西村倫子, 土屋賢治. 成人における発達障害の疫学と有病率 (特集 大人の発達障害) -- (発達障害の基礎知識). 診断と治療 = Diagnosis and treatment. 2019;107(11):1313-6.
- 2) Baron-Cohen S, Wheelwright S, Skinner R, Martin J, Clubley E. The autism-spectrum quotient (AQ): evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. J Autism Dev Disord. 2001;31(1):5-17.
- 3) Baio J, Wiggins L, Christensen DL, Maenner MJ, Daniels J, Warren Z, et al. Prevalence of Autism Spectrum Disorder Among Children Aged 8 Years - Autism and Developmental Disabilities Monitoring Network, 11 Sites, United States, 2014. MMWR Surveill Summ. 2018;67(6):1-23.
- 4) Williams D. Theory of own mind in autism: Evidence of a specific deficit in self-awareness? Autism. 2010;14(5):474-94.
- 5) 厚生労働省政策統括官. 人口動態統計. 厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当); 2021. pp.36-39.
- 6) 橋本和明. 【子育て支援-乳幼児と向き合う心理臨床】発達障害を抱える親と児童虐待 生活と切り離された子育てを支援する. 臨床心理学. 2012;12(3):343-8.
- 7) Zablotsky B, Bradshaw CP, Anderson CM, Law P. Risk factors for bullying among children with autism spectrum disorders. Autism. 2014;18(4):419-27.
- 8) Nansel TR, Craig W, Overpeck MD, Saluja G, Ruan WJ, Health Behaviour in School-aged Children Bullying Analyses Working G. Cross-national consistency in the relationship between bullying behaviors and psychosocial adjustment. Arch Pediatr Adolesc Med. 2004;158(8):730-6.
- 9) 武井明. 不登校を呈した高機能広汎性発達障害の臨床的検討. 精神医学. 2009;51(3):289-94.
- 10) 梅永雄二. 【職域における発達障害者への対応と支援】発達障害者の就労支援の現状と課題. 日本医事新報. 2018(4910):39-44.

【倫理審査委員会】

承認番号 : B-2016-029

【利益相反(COI)】

本研究に関して開示すべき利益相反はない。